

特別支援教育専攻学生対象の障害理解のための教材開発

—その 10：COVID-19 下における病弱・肢体不自由教育における教材作製と活用—

企画・司会者	村上由則	(東北福祉大学)
話題提供者	八島 猛	(上越教育大学))
	大江啓賢	(東洋大学)
	菊池紀彦	(三重大学)
指定討論者	寺本淳志	(宮城教育大学)

KEY WORDS: 病弱教育 肢体不自由教育 障害理解

【企画趣旨】

特別支援教育専攻学生の指導では、対象である障害児・者の使用する機器・道具類の提示と使用方法の解説がなされるのが一般的である。これは感覚・情報系障害では、指導上大きな意義がある。また、肢体不自由・運動障害等では、車イスや補助具類が活用され、指導効果を上げている。

しかし、病弱教育領域では病気の児童生徒の困難理解を促す「病気体験」は、健常学生にはできない。そこで、病弱教育（心理・生理・病理）領域担当教員の多くは、病院等の見学、身体機能や病気療養生活を取り扱った映像資料等を活用し、学生に病気の児童生徒の生活の様子や困難をイメージさせる方法を中心に授業を展開している。一方、肢体不自由（心理・生理・病理）領域においても、映像資料等から補助具等が必要な要因としての困難状況や障害児・者が直面する生活上の困難感を間接的にイメージさせる方法に重点を置くのが実状である。

このような大学等における授業展開の実態を踏まえ、本シンポジウムでは、主として病弱・肢体不自由教育領域専攻の授業において活用し得る「体験」「体感」「製作」可能な教材の開発と提案を行ってきた。その上で、話題提供者間で議論を深め、より有効な教材開発へとつなげることを目的として、具体物の提示と改良、授業方法の交流を含めて議論を継続してきている。

【企画者・話題提供者の教材モデル提案の経過】

ここでは、企画者および話題提供者が、特定の疾病・障害の身体状況や治療・管理、それらによる「困難」を「体験」「体感」すること、加えて疾病・障害メカニズムの可視化をめざし、学生や受講者が「製作」可能な教材サンプルを提示し、それぞれの利点・改良点をめぐって議論を行う形式としてきた。

これまで、この一連のシンポジウム(2011 年～2018 年)で企画者・話題提供者・討論者が提示してきた教材モデルのテーマは、「喘息発作における呼吸困難」「血糖自己検査・自己注射等における不快感情」「血友病性関節症等における『痛み』」「人工透析」「てんかん発作」「不随意運動」「アレルギー」「重度運動障害のコミュニケーションの困難理解」などである。これらを受けて 2019 年のシンポジウムでは、学生による教材作成体験を取り入れた「授業」とその改善の取り組みについて検討を行った。

【新たな課題・オンライン授業と企画者の授業実践例】

これまで、この一連のシンポジウムにおいて提示してきた教材とその作製プロセスは、いわゆる健常学生が、病弱児等の体験する「困難」「障害」を理解する授業構成に寄与することを目的としたものである。その前提は、具体物としての教材を媒介とする、通常の授業形態いわゆる対面授業であった。ところが、2020 年初頭からの COVID-19 感染拡大に伴い、大学の授業の多くはオンライン形式へと変

更を迫られることになった。本シンポジウムに関わる一連の研究においては、Web 上の教材データベースやアップロードした授業動画も活用してきたが、学生による教材作製と模擬授業については、対面場面・対面授業を中心に据えて「障害理解」の検討を行ってきた。具体物の作製と、授業場面の共有を如何にオンライン授業に組み込み、「障害理解」を促すが、新たな課題となった。この課題は、COVID-19 の感染拡大の終息も ICT を活用する授業内容・方法の探究の視点に立てば、今後長く検討されるべき課題と言える。

授業内容・形式プロトタイプ：オンライン授業の形式に際し、学生が体験する模擬授業と教材作製は授業者（ここでは企画者）主導で、「重度運動障害のコミュニケーション障害」「喘息発作による陥没呼吸」をテーマとした。受講学生を 5・6 名からなる 6 グループに分け、グループ内学生の情報交換もオンライン（メール・SNS 可）とした。対象を大学生・現職教員として教材開発と模擬授業構成を行うように要請した。

受講学生の活動と理解の実態：各学生グループ内における教材作製に使用する材料の統一や作製手順は共有されていた。しかし、具体物としての教材を使用しての困難体験については、限定的で「大変そう」「苦しそう」といった表面的な感想を述べるに止まっている。これは困難体験を実施するプロセスについての授業者の指示・発問とそれを受ける学生との間のコミュニケーションが表層的であり、時間的なラグがあることによると考えられた。「テレビの中のドキュメンタリー」を視聴しているような水準の認識のような印象を受けた。一方において、授業者が発問により深い内容を引き出そうとすると、困難理解の「押しつけ」となる。この状況もまた、障害理解が浅い水準に止まることに繋がると考えられた。

【話題提供と指定討論の方向性と検討課題】

以下に示す企画者の仮説 2 点を中心にシンポジウムでの議論を展開する。

- ① COVID-19 と感染拡大メカニズムの理解を促す教材：病弱教育に限らず公衆衛生一般の理解を促す教材となり得ると思われる。特に後者は、慢性疾患のアドヒアランスの問題に関わる「状況教材」としての側面をもつと想定される。
- ② オンラインで「障害理解」を促す教材と授業内容・方法：対面場面でも「ドキュメンタリー視聴」に終始する「障害理解」の改善が本シンポジウムの課題である。オンラインとなりその課題が、逆により明確となったと想定される。

* 本研究は、科学研究費基盤研究(C)（課題番号 17K04911, 20K02991）により実施した。
(MURAKAMI Yoshinori, YASHIMA Takeshi, OOE Hirokata, KIKUCHI Toshihiko, TERAMOTO Atushi)